

産・官・学を結ぶ

私学ジャーナル

VoL.23No. 5

2000/ 5



「椅子の構成」

○ 座談会

「別府」をアジアにおける「国際キャンパス」に

出席者 井上別府市長、西村別府大学理事長、同中村学長、
立命館アジア太平洋大学坂本学長

○ インタビュー

奈良県内の私立大学間で初の単位互換制度実施

体験実習から環境問題を考える

「地球環境と世界市民」国際協会・第2回大会開催

「地球環境と世界市民」国際協会・第2回大会が去る4月1日、2日甲南大学8号館と1号館で開催された。同協会は、昨今の深刻化する地球環境問題について、世界市民が深く議論し、解決に向けて国際的視野からの取り組みを行うことを目的に、甲南大学文学部教授谷口文章氏（同協会会長）が中心となって1998年4月に設立され、これまでも多彩な活動を展開してきた。

市民からも参加者を募った今回の大会では、研究発表会、第一回大会報告、特別講演（甲南大学における環境教育情報の教材開発「インターネットを使用した大学教材の紹介」）の他に、神戸大学交響楽団や甲南大学グリーンクラブによるミニ演奏会や、

ワークショップ（エコ・クッキングの実習、ペットボトルを使ったりサイクル工作の作業体験）といった遊びが入ったイベントが行われ、参加者は体験実習に真剣に取り組んだ。

環境問題を考えるパネル展示や情報交換の場でのディスカッションなども催され、体験・実習を通して環境創造の大切さを考える学習の場となった。

EcologicalでEconomicalなクッキング

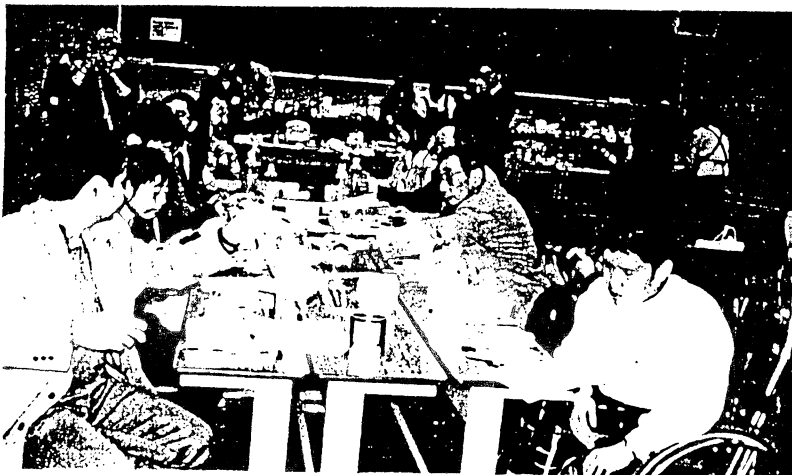
ワークショップパートI（エコ・クッキング）は料理研究家高井賢一氏と調理師榊みどりさん、パートII（ペットボトルを使ったりサイクル

工作）は静岡県立浜松城北工業高等学校教諭飯尾美行先生の指導のもとでそれぞれ進められた。

食材として上げられたかんぞう、姫おどりこ草、あきのげし、かたばみ……。最近では聞き慣れない言葉であるが、これらは甲南大学の周辺や谷口教授の住まいの近辺で採集された野生植物である。パートIのエコ・クッキングでは、このような野生植物を工夫を凝らして調理したものが紹介され、見学者の間から驚きの声が上がっていた。

エコとは、エコロジー（ecology：生態学・人間生態学）とエコノミー（economy：節約・儉約）の意味を指し、実習は低コストで廃棄物を出さないようにするのはもちろんのこと、身の回りにある自然の命を自由な発想や工夫を凝らしておいしい料理に仕上げることを目標に進められた。

具体例として「大根」を取り上げると、通常捨てられがちな葉や皮の部分を塩漬けにしたり、炒めたり、料理の彩りとして使用したりして、1つの素材から3つの味が楽しめる工夫が施された。圧力鍋や保温調理器具を使用し、熱源の消費をおさえ



▲グループになってペットボトルの船を作る参加者

るといった省エネ対策も印象深かった。さらには、調理の後始末にゴムベラや布の切れ端を使って皿や鍋の汚れを落とし、合成洗剤の代わりにアクリル系のたわしで皿洗いをする方法がとられた。材料収集から後始末まで「エコ」にこだわったさまざまな工夫がみられた。

素朴な体験実習から学ぶ

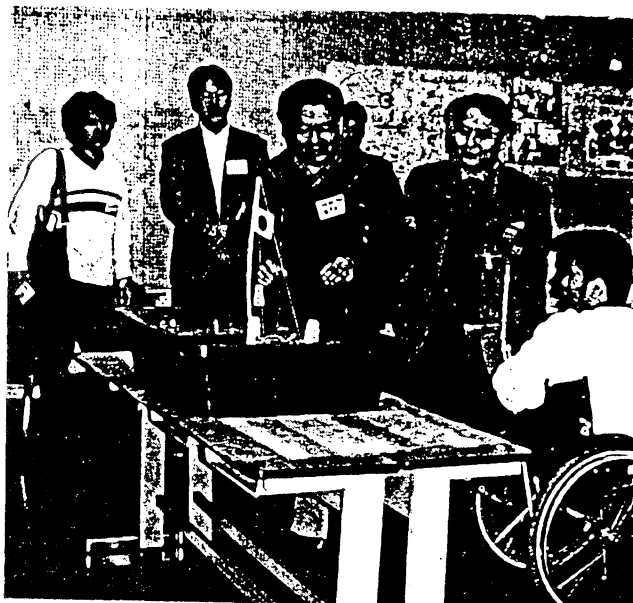
つづいてパートIIのペットボトルの再利用の体験学習では、ペットボトル、発砲スチロール、塩化ビニール板、竹ひご、たこ糸を使ってペットボトルの船を作った。まず円柱の発砲スチロールの円周に塩化ビニール板をさしこんで羽根車にする。このあとペットボトルを船体にし、竹ひごの弾力性とたこ糸を生かし、水に浮かべると発進するというしくみ。材料費は200円弱。誰でも楽しく簡単に作れる工作であった。

この体験学習に記者も参加させてもらった。数名に分かれて互いに教

え合いながらペットボトルの船作りに取り組む。幼少時代の素朴な工作を思い出し、完成したときには達成感を味わうことができた。みんな同じものを作ったわけだが、自ら手がけた作品にはそれぞれオリジナリティがあった。

その後開かれた意見交換の中で、ペットボトルのリサイクル体験

実習について「ペットボトルの船はいずれまたゴミとなって処分されるのではないか」という厳しい声もあったが、「物づくりの体験から学ぶものはあった」という意見も出された。一方、エコ・クッキングでは「これまでの料理の作業を違った視点から見ることができた」「旬の味や食べられる野生植物の新たな発見があった」という声が多かった。1人ひとりが



▲完成したペットボトルの船を水槽に浮かべて動かしてみる参加者（中央は飯尾先生）

環境問題を身近にとらえられたという点で、今回のワークショップの目的が果たされたという印象を受けた。

環境問題について論議しあうのもさることながら、今回のように多くの人が集って楽しみながら体験・手感する、それが問題解決へのステップになることをワークショップは教えてくれた。

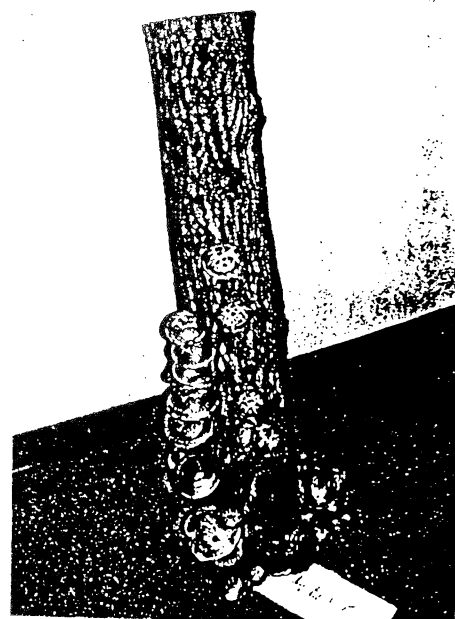
ドイツで生まれたビオトープ 神戸でも活発な活動が展開

ワークショップが開かれた教室には、ビオトープ関連を中心にさまざまな図解・写真・地図のフリップや、ビオトープで生息する生物が展示されていた。ビオトープとはドイツ語のBIO（生物）とTOP（場所）の合成語であり、「野生生物の生育場所」を意味する。

現在都市部を中心に野生生物が姿を消しつつあるのは必至。そのため、

失われた場所に再び自然を還元しようと、野生生物の生息場所（ビオトープ）を確保する活動がドイツで始まった。この試みは日本の教育施設や公共施設でも始まっている。

会場となった教室には神戸市立向洋小学校、神戸市立本庄小学校、甲南大学の他、ポートアイランド中央公園、伊吹台谷口公園などのビオトープの取り組みが紹介されていた。



ビオトープで育ったシイタケ